

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻  
英語教授学領域  
松田 香織

【論文題目】 高校生への相互教授法を用いたリーディング方略の指導  
ークリティカル・リーディング能力育成のための介入的研究ー

【授与する学位の種類】 博士（文学）

### 【論文審査の結果の要旨】

本論文は、高校において相互教授法に基づく読解活動を行い、クリティカル・リーディング（批判的読み）の能力及び方略使用の向上度を検証し、今後の英語教育への示唆を提案することが研究目的である。

序章では、平成 25 年度施行の高校新学習指導要領（外国語）及び PISA 型読解力において批判的思考力や批判的読みの能力の育成が求められていることを本論文の研究背景として述べ、研究の目的と構成を明らかにしている。第 1 章のニーズ分析では、高校英語教員へのアンケート調査の結果、英語授業において批判的思考力を育成することが可能であり、また必要であると考えていることが判ったとしている。

第 2 章の先行研究では、文献研究に基づいて、批判的読みには、一般的な読解方略とともに、1. 文章の内容と自分の知識や経験を関連させながら読む、2. 自分ならどうするかを考える、3. 論理的な整合性・首尾一貫性があるかどうか疑問を持ちながら読む方略が必要であるとしている。また、これらの方略の使用を促すために、効果的な発問や自己の読解方略をモニター・コントロール、評価するメタ認知的活動も重要であると示唆している。さらに、発問や協調的なメタ認知の促進には、Palincsar & Brown (1984)の相互教授法が有効であるとしている。Vygotsky 理論を背景とする相互教授法では、学習者同士の相互的な発問や教え合い等による、認知的側面からの足場掛けが重視されるとしている。ポートフォリオを、読解過程を可視化・共有化し、メタ認知的活動として記録・評価する手段として捉え、相互教授法に基づいたペアでの読解中に使用した発問・方略等をポートフォリオに記録する活動の必要性を提起している。

第 3 章の予備的研究では、実践後にフォーカス・グループ・インタビュー等を行った結果、学習者がペアでの読解、協調的なメタ認知的活動を行うことができる認知的レベルにあることが判ったとしている。

第 4 章の研究方法では、実践内容と検証方法を述べている。相互教授法によるペアでの読解活動を行い、ポートフォリオに下線・キーワード・文章構造・疑問点等の注釈を書き込んだり、使用した発問・方略を記録するとともに、このポートフォリオを用いたメタ認知的な振り返りをペアで行い、評価結果と改善点を reflection sheet に記述する活動を半年間実施した。また、量的分析として、事前と事後で、Ikeda (2007) の読解方略アンケートに批判的読みの方略を付加したアンケートと批判的読みの能力を測定できるテストである The Critical Reading Inventory (text-based, inference, critical response, retelling から成る)を実施し、有意差を検証した。さらに、クラスター分析により、クラスを 3 グループに分け、グループ間の有意差についても検定した。質的分析では、ポートフォリオ、reflection sheet 等の記述の変化を、発問・方略の種類・頻度等の観点から分析するとともに、概念間の関係性を可視化できるテキストマイニングのプログラムである KeyGraph を援用して経時的に分析した。各グループから各 1 名の学習者を選び、事後インタビューを行うとともに、ケーススタディとして、時系列のデータと併せて分析を行った。Retelling(再話)の採点における評定者間信頼性及びデータのトライアングレーションによる内的妥当性の確保は評価に値する。

第 5 章の分析結果と考察における量的分析の結果は次の通りである。クラスのテスト全体の結果については、分散分析(3 グループ間)と Tukey の HSD 法による多重比較(各 2 グループ間)の検定を行った結果、3 グループ間、各 2 グループ間において有意差があった。対応のある t 検定により検証した結果、クラスのテスト全体の得点において、事前・事後の有意差が見られた。また、第 2、第 3 グループの critical response (批判的応答)で事前・事後の有意差があった。方略アンケートは順序尺度のため、Kruskal-Wallis 検定(3 グループ間)を使用した結果、方略アンケート全体、クリティカル・リーディング方略のアンケートの結果において有意差は見られなかった。Wilcoxon の符号付き順位和検定により検証した結果、各アンケートの結果において事前・事後の有意差があった。ピアソンの積率相関係数により、各グループのクリティカル・リーディング方略に関するアンケート結果と、上記の 4 つのテスト項目との相関の分析の結果、事後の第 3 グループの critical response との間に中程度の相関が見られた。また、事後のテスト項目相互の関係性を分析した結果、inference (推論)の得点が高い程 critical response で正しく解答する傾向が見られた。質的分析では、KeyGraph を援用したポートフォリオ等の詳細な時系列分析とケーススタディを踏まえ、学習者間の足場掛け、発問の種類、記号化、方略を使用した理由の記述等により、理解の過程や使用した方略を振り返らせるメタ認知的発問、批判的読み

に繋がる発問が増加し、方略の意識・使用頻度も向上したとしている。

全体として、ポートフォリオを活用した、学習者相互の発問の促進、メタ認知的活動により、より読解力が低いグループを中心に批判的読みの能力、発問・方略の意識と使用が向上したことは、学習者相互の足場掛けの観点から、研究の意義があったと考えられる。また、批判的読みの能力の向上には、文章構造の理解等、批判的読みの方略以外の読解方略、*inference*、*retelling* の能力等も関わる点が重要な点である。

第6章では、高校リーディング教科書の発問分析の結果として、批判的読みを促す発問が見られなかったことを指摘し、授業でのメタ認知的発問等の活用を教育的示唆として提起している点は評価できる。

ポートフォリオを学習者がペアで発問・方略等を記録・評価する手段としている点、高校の英語授業で批判的読みを実践・評価している点は、管見では、先行研究には見られない独自性であると考えられる。

以上により、本論文が博士(文学)の学位を授与されるための十分な資格を有していると判断した。

### 【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成26年6月23日(月)に、審査委員会委員5名の出席のもとに実施された。最初に本人から学位論文の概要に関する発表が英語でなされた後に、口頭試問が行なわれた。本人により、学位論文における研究の背景・目的・方法・成果及び関連領域の専門的学識に基づいた応答が適切になされ、申請された学位論文が博士(文学)の学位を授与するに値する水準にあることが確認された。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

### 【審査委員会】

主査 山下 徹  
委員 合田 美子  
委員 福澤 清  
委員 渡邊 功  
委員 バウアー トビアス